松本達郎九州大学名誉教授・日本学士院会員による 日本の堆積学進展への貢献

岡田 博有*

Prof. Tatsuro Matsumoto's contribution to the development of sedimentology in Japan

Hakuyu Okada*

Sedimentology had been developed in Japan, as in Europe, from the 1950s, though the term “taiseikigaku” (sedimentology in English) was proposed in Japan by Prof. T. Yagi as early as in 1929 (Okada with Kenyon-Smith, 2005). For the actual development of sedimentology in Japan, Prof. T. Matsumoto, Professor Emeritus of Kyushu University and Member of the Japan Academy, has made a great contribution to the sedimentology, in addition to his works as a worldwide palaeontologist for Cretaceous ammonites.

まえがき

日本の堆積学は現在の国際的な研究活動の中心になっており、その成果は2006年夏に日本で開催された17th International Sedimentological Congressの大成功によく示されている(松本, 2007a, b; 松田, 2007; 池原, 2007)。このような国際的な貢献をしている日本の堆積学であるが、世界でも最初に「堆積学」用語が1929年に八木次男(1929)によって日本で提唱されたのに(岡田, 1993, 1998a, b, 2002, 2004, 2006; Okada, 2007; Okada with Kenyon-Smith, 2005), その用語が普通に使われるようになったのは1950年代になってからであった。この状況は日本だけでなく国際的にも同じであった。最初に堆積学の英語表現“sedimentology”がアメリカで提唱されたのは1932年(Wadell, 1932)であったが、アメリカで使用されることなく国際化して一般化したのは国際堆積学協会(International Association of Sedimentologists)が確立した1950年代であった(岡田, 1998a)。

このような堆積学分野の成立を国内で組織化しはじめるに当たって松本達郎九州大学名誉教授(図1)の活動が大きかった。著名な古生物学者である松本達郎名誉教授がわが国における堆積学の進展にどのような貢献をされたかをここに具体的に紹介したい。

松本達郎教授による堆積学への対応

松本達郎名誉教授は現在「日本堆積学会(Sedimentological Society of Japan)」のシニア会員であり、本学会会員の最高齢者でもある。しかも、日本に堆積学関係組織が誕生して以来、現在までこの学会の会員になっている。この背景には松本名誉教授の日本の堆積学への貢献が大きかったことと現在も堆積学への関心が高いことによるものと思われる。そこで、松本達郎名誉教授の現役教授時代を中心に堆積学への関心とその経緯を示す具体的な関わりを次に見ておきたい。

(1) **地史学から見た堆積学** 九州大学理学部地質学科勤務時代の松本達郎教授は最初期から白亜紀のアンモナイトとイノセラムス化石を中心とした古生物学と層序学、地史学、構造地質学に深い関心を持っていた(松本, 1949, 1998; 種子田・勘米良, 1977; 岡田, 2002; Okada with Kenyon-Smith, 2005)。その中でも層序地質学としての古地理論、古地文学(岩相論)、堆積輪廻論に強い関心を寄せていた(松本, 1949)。当時、「堆積学」新分野を八木次男と共に提案していた東北大学の高橋純一教授(高橋・八木, 1929; 岡田, 2001; Okada, 2007)が、油田岩の堆積について堆積構造、堆積盆地の理解が重要であるとして水成岩石学(岩相論)を強調していた(松本, 1949, p. 96)。これらの内容は現在の堆積学である。このような観点からの松本達郎教授による研究成果は、大分県大野川盆地(松本, 1936)、熊本県天

受付: 2008年11月10日 受理: 2008年12月12日

* 〒812-0041 福岡市博多区吉塚4-8-36-601

4-8-36-601 Yoshizuka, Hakata-ku, Fukuoka 812-0041, Japan

草の御所浦島（松本，1937，1938），熊本県御船地方（松本，1939），サハリン（樺太）の白亜系（松本，1940; Matsumoto, 1942），北海道の白亜系（Matsumoto, 1942, 1943; 松本，1951a），九州北部の地質（松本，1951a, b, 1969），日本の地史学と地向斜堆積物（松本，1949, 1967, 1968, 1971a, b, 1973a, b）など，多彩であった．とくに，1950～1970年代の日本の堆積学の推進者として活躍していた庄司力偉（岡田，2008）は著書の「5. 堆積学の現状と将来の展望」（庄司，1971，p. 276）のなかで，松本達郎教授による日本の地向斜堆積物に関する総合研究に大きい期待を推せていた．

(2) 堆積学研究への指導 堆積学への重要性から松本達郎教授は自身の講座所属の学生達に堆積学分野の研究指導を行っていた．その状況は，勘米良亀齡（昭和21年（1946年）9月九大地質学科卒，1953年日本地質学会奨励金受賞）の炭酸塩岩の研究（勘米良，1967, 1977, 1987, 1993; 勘米良ほか，1982，など）と藤井浩二（昭和25年（1950年）3月九大地質学科卒，1957年日本地質学会奨励金受賞；昭和25年（1950年）～31年（1956年）に九大地質学科助手）の堆積岩石学の研究（藤井，1956; Fujii, 1958, 1962，など）で代表されるが，さらに10数人に達する松本教授の指導学生たちにもよく示されていた．

堆積学の用語が松本達郎教授の指導の下で最初に用いられるようになったのは1964～1965年に著者がBritish Council Scholarshipをえて，イギリスのレディング市に最創設の“Sedimentology Research Laboratory, University of Reading”に留学してからであった．この様子は岡田（1966）に述べられており，この堆積学用語を使った論文を出している（Okada, 1965）．こうして「堆積学」が松本教授の下で本格化することになった．

なお，九州大学での研究・教育活動の詳細は松本達郎名誉教授による記述が参考になる（松本，1984）．

松本達郎教授による日本の堆積学発展への貢献

日本の堆積学が組織的に本格化しはじめたのは1950年代であった（水野，1967; 青柳・水野，2007）．この堆積学本格化のために体系作りが始まったのが1952年の堆積学研究会の設置であった（水野，1967）．それが現在の日本堆積学会として本格化することになるのである（岡田，1998c, p. 247 参照）．

日本地質学会は第6期の日本学術会議による長期計画の検討を受けて1963年に評議員会で地質学長期研究計画の検討に入ることにした．1965年4月になって第6期第5回地質研連委員会で松本達郎教授を会長とする表層地質長期研究計画小委員会が発足し，1966年に第7期地質研連委員会のなかには松本達郎教授を委員長とする「堆積学研究会

図1 松本達郎九州大学名誉教授・日本学士院会員（勘米良ほか，1997）．

設立小委員会」となった（岡田，1998b, 2003, 2004）．この委員会の幹事には水野篤行氏が指名されていた．こうして，この検討成果は松本・水野（1967a, b, c）によく示されている．また，この検討会議には水谷伸次郎氏も参加していた．この委員会は「実験堆積学研究所（仮称）」を形成し，1967年7月にはこれを新案としてA, B案の2案にまとめた（大森，1968）．しかし，堆積学の長期研究計画の実現には他の研究計画とともに不可能となった．この経過はともなく，こうして松本達郎教授は日本の堆積学の組織化に大きく貢献したのであった．

松本達郎名誉教授の履歴

松本達郎名誉教授の略歴は2007年11月2日に迎えた満93歳の生誕資料（勘米良ほか，2007）を基にして，次のようにまとめることができる．

氏 名：松本 達郎（まつもと たつろう）
生年月日：1913年（大正2年）11月2日
本 籍：東京都文京区小日向2丁目25番地
住 所：福岡市南区南大橋1丁目28番地5号
学 歴：

1933年3月 静岡高等学校理科甲類卒業
1936年3月 東京帝国大学理学部地質学科卒業

1939年3月 東京帝国大学理学部大学院退学

職歴:

1939年4月 九州帝国大学助教授(理学部)

1944年12月 九州帝国大学教授(理学部)

1953年4月 九州大学教授(理学部)

1977年4月 九州大学停年退職

1977年5月 九州大学名誉教授

1977年4月 西南学院大学教授

1986年3月 西南学院大学停年退職

1996年12月 日本学士院会員

学会:

1972年～1975年 太平洋学術協会固体地球科学委員会
(Scientific Committee on Solid Earth Sciences, Pacific Science Association) 委員長

1972年～1976年 国際古生物学協会(International Palaeontological Association) 副会長

1973年～1977年 日本古生物学会会長

1974年～1976年 日本地質学会会長

1979年1月 日本古生物学会名誉会員

1983年4月 日本地質学会名誉会員

1994年6月 石油技術協会名誉会員

受賞:

1944年 西日本文化賞(西日本新聞社)

1960年 朝日文化賞(朝日新聞社)

1961年 紺綬褒章

1969年 日本学士院賞

1981年 日本古生物学会賞(横山賞)

1986年 勲二等瑞宝章

あとがき

日本の堆積学の充実には松本達郎名誉教授による大きい貢献があったことをここに示すことができた。本来、日本古生物学会への大貢献者である松本名誉教授は古生物学と層序学を基にした堆積学発展に大きい成果をあげてくださった。ここに改めて日本の堆積学進展に尽くされた松本達郎名誉教授の業績を高く評価申しあげたい。

謝辞: 松本達郎先生の日本堆積学組織化への貢献に対して、松本先生の現役時代に助教授として活躍されていた勘米良亀齡先生、および日本地質学会における堆積学発展への配慮に関する大森昌衛麻布大学名誉教授と水野篤行元愛媛大学教授(当時、工業技術院地質調査所技官)、さらに故庄司力偉元東北大学教授に厚く感謝申しあげたい。

なお、堆積学研究編集事務局の保柳康一先生による本稿へのご配慮に厚く感謝申しあげる。

松本達郎教授による堆積学関係の主な業績

(*: 本文中に引用あり)

松本達郎, 1936*: 九州大野川盆地の地史学的研究. 地質雑, **43**, 758-786, 815-852.

松本達郎, 1937*: 天草御所浦島の地質. 地質雑, **44**, 594-596.

松本達郎, 1938*: 天草御所浦島における地質学的研究(特に白亜系の地史学的研究). 地質雑, **45**, 1-46.

松本達郎, 1939*: 熊本県御船地方の地質学的研究(特に白亜系を中心として). 地質雑, **46**, 1-12.

松本達郎, 1940*: 樺太白亜系最上部龍ヶ瀬層群の構成物質について. 地質雑, **47**, 383-385.

Matsumoto, T., 1942*: Fundamentals in the Cretaceous stratigraphy of Japan. *Mem. Fac. Sci., Kyushu Imp. Univ., Ser. D, Geol.*, **1**, 129-280.

Matsumoto, T., 1943*: Fundamentals in the Cretaceous stratigraphy of Japan. Part II & III. *Mem. Fac. Sci., Kyushu Imp. Univ., Ser. D, Geol.*, **2**, 97-237.

Matsumoto, T., 1949: The Late Mesozoic geological history in the Nagata Province, Southwest Japan. *Japan. J. Geol. Geogr.*, **21**, 235-243.

松本達郎, 1949*: 日本地史学の課題. 平凡社, 東京, 178p.

松本達郎, 1951a*: 蝦夷層群と関門層群. 地質雑, **57**, 95-98.

松本達郎, 1951b*: 北九州・西中国の基礎地質構造概説. 九大理学部研究報告, 地質, **3**, 37-48.

Matsumoto, T., 1952: A note on the Cretaceous history of the Circum-Pacific region. *Japan. J. Geol. Geogr.*, **22**, 109-118.

Matsumoto, T., 1967: Fundamental problems in the Circum-Pacific orogenesis. *Tectonic- physics*, **4**, 595-613.

松本達郎, 1967: 白亜紀海侵の本質について. 佐々保雄教授還暦記念論文集, 39-55.

松本達郎・水野篤行, 1967a*: 第7期地質学研究連絡委員会第2回堆積学研究所設立小委員会報告. 地質雑, **73**, 179-180.

松本達郎・水野篤行, 1967b*: 堆積学研究所(仮称)に関するアンケート結果について. 地質雑, **73**, 357-360.

松本達郎・水野篤行, 1967c*: 第7期地質学研究連絡委員会第5回堆積学研究所設立小委員会報告. 地質雑, **73**, 539-540.

松本達郎, 1968*: 地向斜堆積物の総合的研究序論. 総論. 地質学論集, **1**, 1-3.

松本達郎, 1969*: 対馬の地質とその問題点. 国立科学博物館専報, **2**, 5-18.

松本達郎, 1971a*: 地向斜堆積物の研究. 総論. 地質学論集, **6**, 1-7.

松本達郎, 1971b*: 地向斜堆積物について. 日本鉱山地質学特集号, **4**, 95-99.

Matsumoto, T. and Okada, H., 1971c: Clastic sediments of the Cretaceous Yezo Geosyncline. *Mem. Geol. Soc. Japan*, **6**, 61-74.

Matsumoto, T. and Okada, H., 1975: Coarsening-upward cyclic sedimentation in geosynclinal belts and its tectonic significance. *9th Intern. Congr. Sedimentology, Nice*, 269-275.

松本達郎, 1973a*: 環太平洋の地史からみた日本の中生代. 地質雑, **81**, 461-471.

- 松本達郎, 1973b*: 九州における中央構造線の問題. 杉山隆二編: 中央構造線. 東海大出版会, 209-220.
- Matsumoto, T., 1977: Timing of geological events in the circum-Pacific region. *Can. J. Earth Sci.*, **14**, 551-561.
- 松本達郎, 1979: 海進・海退と海面変化. 地学雑誌, **88**, 144-154.
- 松本達郎, 1984*: 九州大学地質学教室及び関係部門の初期の歴史. 地学雑誌, **93**, 237-247.
- 松本達郎, 1998*: アンモナイトと白亜紀の研究. BCJA (British Council Japan Association): BCJA の本. 留学経験者が語る英国の学問と生活. 風人社, 118-121.

文 献

- 青柳宏一・水野篤行, 2007: 日本堆積学への歩み. 堆積学研究, **65**, 45-48.
- 池原 研, 2007: ISC2006 公開シンポジウム「スマトラ島沖地震とインド洋津波—地質から読み取る過去の地震と津波」報告. 堆積学研究, **64**, 169-172.
- 藤井浩二, 1956: 九州八代地方中生界の砂岩. 地質雑, **62**, 193-211.
- Fujii, K., 1958: Petrography of the Cretaceous sandstones of Hokkaido, Japan. *Mem. Fac. Sci., Kyushu Univ., Ser. D, Geol.*, **6**, 129-152.
- Fujii, K., 1962: Petrography of the Upper Palaeozoic sandstones from the Yatsushiro area, Kyushu. *Mem. Fac. Sci., Kyushu Univ., Ser. D, Geol.*, **12**, 179-204.
- 勘米良亀齡, 1967: 日本の古生代石灰岩に関する堆積学的研究の現状と問題点. 日本地質学会・日本鉱山地質学会・日本鉱物学会・日本岩石鉱物学会・日本粘土学会連合学術大会: 堆積学に関する諸問題. 名古屋大学, 85-89.
- 勘米良亀齡, 1977: 球磨山地の上部三疊系田浦層石灰岩の岩相と生相. 九大理研報 (地質), **12**, 147-156.
- 勘米良亀齡, 1987: 3. 炭酸塩岩. 水谷伸次郎・齋藤靖二・勘米良亀齡 (編): 日本の堆積岩. 岩波書店, 85-142.
- 勘米良亀齡, 1993: 戦後の 25 年古生界・四万十帯の研究 — 地向斜造山論の発展 —. 日本地質学会: 日本地質学会 100 周年記念 日本の地質学 100 年. 日本地質学会, 63-74.
- 勘米良亀齡・水谷伸次郎・鎮西清高 (編), 1982: 地球表層の物質と環境. 岩波書店, 318p.
- 勘米良亀齡・岡田博有・坂井 卓・佐野弘好 (編), 1997: 九州大学名誉教授松本達郎業績目録 (1986-1996 年分). 九大理学部地球惑星科学教室気付, 9p.
- 勘米良亀齡・岡田博有・平野弘道・棚部一成・坂井 卓・佐野弘好 (編), 2007: 九州大学名誉教授・日本学士院会員松本達郎業績目録 (1997-2006). 九大理学部地球惑星科学教室気付, 6p.
- 松田博貴, 2007: 第 17 回国際堆積学会議 概要報告. 堆積学研究, **64**, 173-192.
- 松本 良, 2007a: ISC2006 Fukuoka 報告 緒言に代えて. 堆積学研究, **64**, 165-167.
- 松本 良, 2007b: 第 17 回国際堆積学会議報告. 地学雑誌, **116**, 701-707.
- 水野篤行, 1967: 討論会への序. 日本地質学会・日本鉱山地質学会・日本鉱物学会・日本岩石鉱物学会・日本粘土学会連合学術大会: 堆積学に関する諸問題. 名古屋大学, 2-3.
- 大森昌衛, 1968: 地質学関係の長期研究計画の現状. 日本地質学会: 日本地質学会 75 周年記念 日本の地質学 — 現状と将来への展望 —. 日本地質学会, 592-605.
- Okada, H., 1965: Sedimentology of the Cretaceous Mikasa Formation. *Mem. Fac. Sci., Kyushu Univ., Ser. D, Geol.*, **16**, 81-111.
- 岡田博有, 1966: イギリスの堆積学界とレディング大学堆積学研究. 科学, **36**, 153-158.
- 岡田博有, 1993: 層序学から堆積学へ — 堆積学 30 年の研究遍歴 —. 地質雑, **99**, 991-999.
- 岡田博有, 1998a: 堆積学への道. 堆積学研究, **47**, 3-15.
- 岡田博有, 1998b: 日本の堆積学小史. 堆積学研究, **48**, 5-12.
- 岡田博有, 1998c: 堆積学研究会. 堆積学研究会 [編]: 堆積学辞典. 朝倉書店, 246-247.
- 岡田博有, 2001: 堆積学を拓いた人々 (2). 堆積学研究, **54**, 45-48.
- 岡田博有, 2002: 堆積学. 新しい地球科学の成立. 古今書院, 東京, 219p.
- 岡田博有, 2003: 堆積学の中に見る日本 — 日本の科学遺産 —. 地質学史懇話会会報, **21**, 8-13.
- 岡田博有, 2004: 日本における堆積学, その歴史的展開. 堆積学研究, **58**, 5-12.
- 岡田博有, 2006: 堆積学の潮流. 古今書院, 東京, 172p.
- Okada, H., 2007: Prof. Tsugio Yagi (1897-1951), the first proposer of sedimentology in Japan. *J. Sed. Soc. Japan*, **63**, 39-44.
- 岡田博有, 2008: 庄司力偉 (1920-1971): 「堆積学」と「堆積岩石学」の用語使用で日本の堆積学発展を進めた研究者. 堆積学研究, **66**, 27-31.
- Okada, H. with Kenyon-Smith, A.J., 2005: *The Evolution of Clastic Sedimentology*. Dunedin Academic Press, Edinburgh, 251p.
- 庄司力偉, 1971: 堆積学. 朝倉書店, 東京, 284p.
- 高橋純一・八木次男, 1929: 本邦沿海底粘土中の特殊なる結粒. 岩鉄, **1**, 64-71.
- 種子田定勝・勘米良亀齡, 1977: 松本達郎教授の業績. 九大理研報 (地質), **12**, 123-138.
- Wadell, H., 1932: Sedimentation and sedimentology. *Science*, **75**, 20.
- 八木次男, 1929: 北海道海成頁岩の化学的緒性質並に海成風化作用の特異性に就て. 岩鉄, **1**, 17-29.

訃報 松本達郎先生 (九州大学名誉教授・日本学士院会員) のご逝去

松本達郎先生が 2009 年 2 月 7 日午後 3 時 40 分に心不全のため福岡市中央区の病院で死去されました. 95 歳でした. 2 月 9 日午前 11 時から福岡市中央区の積善社福岡斎場で喪主と九州大学理学部地球惑星科学教室との合同葬により, 約 150 人の出席でご会葬が行なわれました. (岡田博有)